

Vol.42 No.3 2003.6

図書館の窓

3

東京大学附属図書館報 The University of Tokyo Library System Bulletin

目次

■ 図書館長に就任して	附属図書館長 小宮山 宏	33
■ 「万国博覧会資料コレクション」について	社会情報研究所教授 吉見 俊哉	35
■ 雑学のすすめ(ぶっくぼすとNo. 6)	アジア生物資源環境研究センター教授 飯山 賢治	39
■ 新規導入データベースのお知らせ	附属図書館情報サービス課参考調査掛	41
■ 生産技術研究所図書室紹介	生産技術研究所図書室	42
■ SciFinder Scholarと「東京大学で利用できる電子ジャーナル」とのリンクについて	情報基盤センターデジタル・ライブラリ掛	43
■ 7月～8月のデータベース定期講習会のお知らせ	情報基盤センター学術情報リテラシー掛	44

図書館長に就任して

附属図書館長 小宮山 宏

この4月から副学長として附属図書館長を併せて務めることになりました。

大学の最も基本的な使命である教育研究活動にとって、学術情報が必要不可欠なものであることは言うまでもありません。大学図書館は、この学術情報を安定的に提供する役割を持っていて、大学における学術情報のシステムを構成する重要な基盤となっています。

東京大学では、全学の学生・研究者に対してサービスを行う総合図書館と様々な学問分野に基づいた学部・研究所の図書館・室(部局図書館)が連携・協力をしながら、教育研究活動に必要とされる学術情報を提供してきました。これら全学にある大小合わせて約60の図書館・室を総称し「東京大学附属図書館」と呼んでいます。



東京大学附属図書館は、全体で800万冊を超える国内最大規模の蔵書を有していますが、これは東京大学創立以来120余年にわたって営々と図書館の充実・発展に尽くしてこられた先人の努力の賜物です。この

貴重な知的財産を後世に引き継ぎ、今後さらに図書館資料を充実していくことが東京大学附属図書館に課せられた使命であると考えています。

近年、大学図書館をとりまく環境は大きく変化しています。情報通信技術の急速な進展を背景に、学術情報は紙媒体から電子媒体へ急激にシフトし、学術情報そのものが図書館を経由しないで直接利用者の手元に届くようになってきました。電子ジャーナルはその代表的なもので、空間的、時間的な制約を受けずしかも同時に複数のアクセスが可能という従来の紙媒体にはない特徴をもっています。

学術情報の電子化は、利用者個人と情報の供給者の直接的な関係を成立させ、媒体としての図書館の役割を衰退させるもののようにうかがえますが、電子学術情報の市場化の状況を見ると、利用者にとって安定した、体系的な情報利用のためには媒体としての大学図書館の機能が不可欠であり、その役割を強化することこそが重要です。

また、国立大学の法人化を目前に控え、大学はこれまで以上に競争的な環境の下で教育研究活動を行い、その成果を社会に還元していくことが強く求められています。

大学図書館は、このような状況の変化や新しい要請に応じて、そのサービス、組織、運営などのあり方について不断の点検と改革を進めていかなければなりません。

東京大学附属図書館は、本学の歴史的経緯のなかで形成された「連絡調整された分散主義」から「共働する一つのシステム」へと運営原則の発展を図り、予算制度、運営組織及び図書業務人員の配置等の改革に向けて、今まさに新たな一步を踏み出そうとしています。また、柏キャンパスにおける拠点図書館として、附属図書館フロンティア・メディアセンター（仮称）の開館に向けて、その基盤整備に着手しました。附属図書館は、教育研究活動における学術情報基盤としての責務を十分に果たすためには、情報基盤センターをはじめ学内の情報関係施設や部署との連携を緊密なものにしていくことが必要です。

廣渡前館長から引き継がれたこれらの課題に取り組んでいくとともに、21世紀に相応しい大学図書館を目指して、附属図書館スタッフと力を合わせて一層の努力を重ねていく所存ですので、全学の皆様のご支援とご協力をお願いいたします。



「万国博覧会資料コレクション」について

社会情報研究所教授 吉見俊哉

19世紀後半から約半世紀に及ぶ世界の文明史は、「万国博覧会」という気宇壮大な国家イベントによって縁どられていた。この時代、博覧会は単に一時のお祭り騒ぎだったのではない。それは、帝国主義や新たに展開しつつあった商業資本主義と技術をめぐる大衆的欲望、そしてその技術が切り開く新しい世界像がふんだんに装飾されたスペクタクルとして上演される特権的な空間だった。これらのことに関しては、かつて拙著『博覧会の政治学』（1992年）で概略を述べたので、いまさらその論点を繰り返そうとは思わない。

ひとつだけ強調しておきたいのは、この19世紀から20世紀にかけての万博が、明らかに都市の具体的な空間に囲い込まれていたにもかかわらず、すでにそうした囲い、つまり都市なり国家なりの境界を越境して、脱領域的な記号やモノ、ヒトの流通システムを築きつつあった点である。博覧会が栄えたのは、テレビはもちろん、ラジオや映画ですら萌芽的な状態にあった時代である。この時代には、記号の流通がなおモノの流通から完全に分離はしておらず、人々はまずモノを集め、配列し、それらを見ることで世界の本質に接近できると信じていた。このような時代にあって、万博は、世界大の規模でモノが集積され、ディスプレイされる舞台だったのだが、この舞台はそれ自体、集め、配列し、展示することでモノとそれがもともと経験されていた具体的な場所との伝統的な結びつきを決定的に破壊してもいたのである。

だからもしも情報化が、私たちの意味世界が次第に場所的な定在性から抜け出して、「すべての硬いものが空気のなかに溶け

出していく」ように、高速で移動可能な重さのない存在に気化していくのを促す過程だとするならば、まさに博覧会こそは、そうした情報化の初期段階を示していたということにもなる。換言するなら、私たちは博覧会の歴史を細かく検証しなおすことで、近代的な世界秩序が、まさにその秩序を表象する場自体のなかで、どのように流動し、再編され始めていたのかを問い返すことができるのである。

以上のような理由から、このほど附属図書館に収蔵された万国博覧会資料コレクションは、単に技術史や産業史、美術史などの分野の研究にとってのみならず、近代における表象と権力、情報、メディア、世界像といったことに関心のある多くの研究者にとっても貴重なものである。このコレクションは、1798年の史上初の国家的な博覧会であったフランスの産業博覧会から、1939-40年のニューヨーク世界博、1942年のムッソリーニによるローマ博まで、150年近くに及ぶヨーロッパやアメリカでの博覧会関連の資料一式66点を集めたもので、多数のカatalogや報告書、写真集、パンフレットから、なかには大変豪華なイラストレーション集や十数巻に及ぶ報告集などまでが含まれている。

このコレクションには、博覧会の歴史の研究にとってさまざまな意味で貴重なものが含まれているが、なかでもとりわけ、よく知られた1851年のロンドン万博以前、18世紀末から19世紀初頭にかけてパリをはじめ欧米各地の都市で催されていた草創期の博覧会の記録が、かなりの数でまともな形で収められているのは、今回のコレクションの最大の特徴のひとつであろう。実

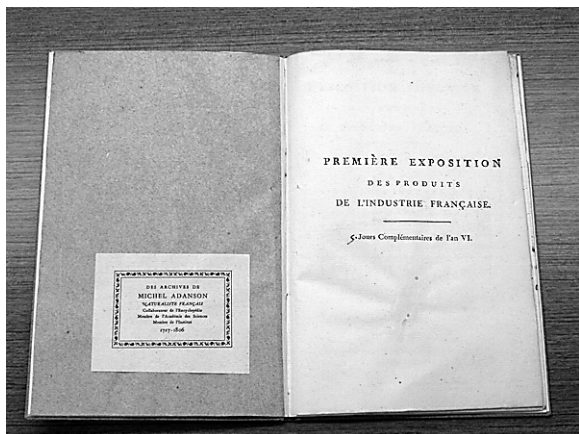


写真1 1798年、パリのシャン・ド・マルスで開催された史上初の産業博覧会の案内書。公式の博覧会案内書としては最も古い。

際、1798年、フランソワ・ド・ヌシャトーらによってパリで開催された史上初の産業博覧会の案内書(写真1)などは、その後無数に出されていく博覧会カタログのまさしく嚆矢であり、19世紀半ば以降につながる博覧会の伝統が、そもそもどのようなあり方から出発したのかを明らかにするきわめて貴重な資料である。

そしてこの1798年の産業博のカタログに始まって、1803年のアントワープでの博覧会のパンフレット、1806年のパリ産業博の報告書など、ごく早い段階の博覧会の具体像が浮かび上がるいくつかの資料がある。さらに、1819年、23年、27年、34年、37年、39年、44年、49年のパリ博、1817年、29年、30年、31年、47年、48年のニューヨーク博、1832年のフィラデルフィア博、1835年、39年、45年のウィーン博、1837年、41年、45年、48年のボストン博、1839年のダービー博、1843年、45年、48年のロンドン博、1844年のバルセロナ博、1846年のマンチェスター博、1847年のブリュッセル博、1847年のグラスゴー博など、1851年以前にすでにきわめて多数開かれていた博覧会の公式カタログ、パンフレット、報告書類がこのコレクションには含まれている。

博覧会の歴史について語る多くの文献

は、どうしても1851年のロンドン万博や55年のパリ万博について語るところから記述を出発させてしまいがちである。たしかに規模や世界性という観点からすれば、博覧会というイベントは、1851年のロンドン万博以降に全面開花した。しかし、博覧会がまさにそうした形態に発展したのは、フランス革命を契機とし、18世紀末から19世紀前半にかけての約半世紀を通じてのことだったのである。今回のコレクションはこの初期の博覧会史に関する資料を多数含んでおり、それらを通じ、博覧会というきわめて19世紀的なイベントが、世紀前半にどのような広がりをもって浮上していたのかを精密に明らかにしていくことが可能になったといえる。

また今回のコレクションでは、すでによく語られてはいるが、それでも重要性が減価しないような、万博史上の画期をなした博覧会、たとえば1889年のパリ万博や1893年のシカゴ万博、1900年のパリ万博、1904年のセントルイス博などについて、写真アルバム、ガイドブック、報告書などから標本資料集、イラストレーション集、解説書まで多様なタイプの資料が含まれているのも興味深い点である。そうしたなかには、当時の博覧会をめぐる社会の雰囲気や観客の反応、この種の研究で最も困難な観客の反応、つまり来場した人々がそれぞれの博覧会をどのように眺めたのか、より正確には、どのように眺めるように期待されていたのかを考える糸口にできる資料もいくつか含まれている。

たとえば、1893年のシカゴ万博に際して出版された『博覧会での一週間(A Week at the Fair)』や『アメリカン・ヒスパニックのための万博見物ポケットガイド(The American-Hispano Pocket Guide to the World Fair)』などといった観光ガイドブックは、当時のアメリカ各地に住む人々が博覧会場までどうやってアクセスしたの

か、どういう順番で、どういうところに注目して展示を見ていくように促されていたのか、そして万博が、人種的、民族的、階級的に多様な人々を「アメリカ化」する装置としてどのように位置づけられていたかなどを考えると参考になろう。また、こうした観光ガイドは、万博観光が中心でありながらも、それを取り囲む都市観光とも結びついているので、同時代の都市のどのような雰囲気の中で万博が催されていたのかを理解する手助けにもなる。

さらにより興味深いのは、たとえば C.M. Stevens 著『ジェレミア叔父さんと近所の人たちのセントルイス万博体験記 (Uncle Jeremiah and His Neighbors at the St. Louis Exposition)』(1904) や M.Holley 著『サマンサのセントルイス万博体験記 (Samantha at the St. Louis Exposition)』というような体験記風の物語で、これらは架空の話ではありながら、当時の人々が万博をどのように受けとめていたのか、あるいはどのような博覧会イメージが一般に広く流通していたのかを考える有用な資料である。前者は、アイルランド訛りの強いこの「叔父さん」が、近所の婦人や紳士、それに子どもたちを連れてセントルイス万博見物に出かけるという物語で、万博での風物や珍場面が軽いタッチで描き込まれている。前書きに、主人公は10年ほど前のシカゴ万博でもガイド役をしたことがあり、その物語は40万部以上売れたと豪語してあるので、「ジェレミア叔父さん」は、当時のアメリカではかなりポピュラーな人物だったのかもしれない。

この「ジェレミア叔父さん」の物語にざっと目を通した限りで気づくのは、ストーリーの主要な部分を占めているのは、博覧会に展示された新しい産業の発明品と出会う経験ではなく、むしろ異民族や異宗教への関心、オリエンタルないしはコロニアルな風景との出会い、極端に大きかった

りする見世物的な事物への驚き、雑踏や迷子から見物客の奇妙なふるまいまでの思いがけない出来事との遭遇などである点だ。そしてもちろん、このセントルイス万博は、会場に設置された巨大なフィリピン集落をはじめ、人種差別的な多くの展示を内包していたわけで、この「叔父さん」の物語にも、「インディアン」や「黒人」、「未開」の人々の表象が大衆的なイメージとして登場している。今回のコレクション全般にいえることだが、博覧会やそれをめぐる大衆的な出版物のなかに表現されていたコロニアルなまなざしを検証することは、こうした資料からも可能である。

コレクションのなかにはまた、資料の視点や形態がユニークで、特別に興味をそそられるものもある。たとえば、Lawrence Weaver 著の Exhibitions and the Arts of Display (1925) (写真2) は、1924年の英国でのウェムベリー産業博での展示を中心にしながらも、19世紀末以来の博覧会におけるディスプレイ技術に焦点をあてた分厚い解説書である。同書は広告の主要な領域として博覧会における「展示」のテクノロジーを位置づけ直し、ふんだんに図版を用いながらその展示技術の新しい展開を紹介している。

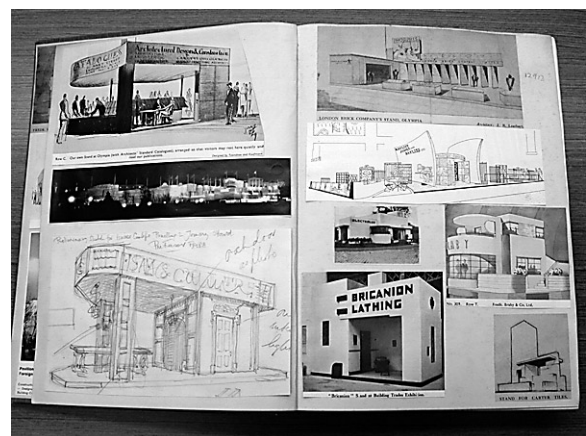


写真2 1924年のウェムベリー産業博での展示技術を紹介した解説書。ページの余白に、コレクターによるものではないと思われる切り貼りが所狭しとなされている。

同書によれば、1922年のミュンヘン博をはじめとする1920年代の中規模博のなかで、それまでの格子状に世界を一望するタイプの陳列方式とは異なり、それぞれの企業や出品者、出品分野ごとにあるセクションを演出する、いわばギャラリー型の展示が主流を占めるようになってきている。この一般的な傾向のなかで、同書は、たとえばテキスタイル、紙や書籍、食料品、陶磁器やガラス製品、宝石、時計、靴、楽器、スポーツ用品、玩具、電気製品、自動車や鉄道、売店のファサードなどが、どのような展示空間を演出してきているかを写真やイラストで紹介しているのである。

これらを見ると、たしかにこの著者は展示の方法論が変化してきていることを強調しているのだが、博覧会の展示は相変わらずモノの集合的な陳列を基本としており、ジオラマやパノラマ、電気照明と映像を駆使した文字通りのスペクタクル的なスタイルへと展示の焦点が変化していく1939-40年のニューヨーク世界博以降に比べれば、むしろ20年代までは過去との連続性のほうが強いのではないかとも思えてくる。いずれにせよこの本は、当時の博覧会が、そこに展示された製品や製造技術、あるいは建築様式という観点からよりも、「展示=ディスプレイ」の技術という観点から捉えられるようになってきたことを明らかにし、万博の19世紀から広告の20世紀への連続的展開を如実に示している。

この資料でもうひとつ興味深いのは、このコレクションのもともとのコレクターによるものであろうか、本の至るところに同時代の雑誌や書籍などから切り抜かれた展示ディスプレイの写真やイラストが貼り付けられ、いわば手作り感覚で本の内容をより豊かにしている点である。博覧会の公式資料は、明らかにある基本的な枠組のなかで、形式に当てはまるように構成されていることが多く、そのぶん無味乾燥に思える

ことも少なくないのだが、こうした切り抜きは、田中芳男の『君拾帖』とまではいかにしても、やはり何がしかの公式ガイド以上のものを伝えてくれる。

今回のコレクションの収蔵により、附属図書館と各部局の図書館には、主に19世紀を中心とした国内外の博覧会に関する資料が相当の厚みをもって収蔵されることになった。前述の田中芳男コレクションをはじめ、戦前の日本国内の博覧会についての多数の公式報告書類や日本政府が参加した海外の万博に関する資料、イラストレイテッド・ロンドン・ニュースをはじめ19世紀の欧米で出されていた各種の雑誌類、あるいは私どもの社会情報研究所も収蔵しているような19世紀の英国での博覧会関係のコレクションやパリ万博に関する若干の資料、さらにいくつかの部局が所蔵している資料を加えれば、大学全体ではかなりの規模のコレクションになるのではないかと予想される。この場を借りて提案させていただくことができるなら、附属図書館といくつかの関連部局図書室が協力して、東京大学の博覧会関係の資料についての総合目録を作成し、ホームページなどで「東京大学博覧会関連コレクション」として公開することはできないだろうか。そのような拡大版のコレクションの主要な一部として、今回のコレクションも大いに役立てられるものとなるだろう。

写真1 Exposition publique des produits de l'industrie francaise

Paris: Imprimerie de la Republique, [1798]

総合図・書庫(請求記号:XB000:1001:1)

写真2 Exhibitions and the arts of display/by Lawrence Weaver

London: Country Life/New York: Charles Scribner, 1925

総合図・書庫(請求記号:XB000:1001:155)

雑学のすすめ

アジア生物資源環境研究センター教授 飯山 賢治
(資源環境学・植物細胞壁科学)

こまった書籍蒐集癖

毎月20日を過ぎたある日、帰宅時間を若干早めて部屋を出る。帰宅途上にある大型書店に立ち寄るためである。数多くの出版社の新書類、選書類の新刊出版日が毎月この日ごろに集中している。生物学を中心とした自然科学の分野、社会科学、人文科学等々あらゆる分野の新書類、選書類を7～8冊5～7千円出して買い込む。通勤途上、スーツのポケットに入れていつでも読むためである。同時に寝室のベッドの枕元において眠くてどうしようもなくなるまで読むためである。時に本を読みふけていて下車すべき駅を通り越してしまうことも毎月1～2回あり、帰宅が遅い時にはあわててタクシーを拾ったり、気候のよいときには1時間ほど歩いて帰ることにもなってしまう。車内で読めるよう朝はラッシュの始まる前に出勤し、夜は少し遅めに帰ることにしている。仕事柄、年に7～8回東南アジア諸国を中心に海外出張するが、行き帰りの航空機の中、夜宿舎で読む本を必要以上に持ち込むことになる。

加えて、月2回ほどインターネットを通して海外の出版社の新刊書をチェックし、自然科学の本を注文する。クレジットカードの請求額にちょっと驚いてしまうこともある。このような本は、ざっと目を通し、将来詳細に読むべきところをマークし、頭の中に書き込んで書棚の開いているところに突っ込んでおく。

私は、1986年から2年間、さらに1990年から4年間オーストラリアの研究機関、

大学に滞在した。日本を離れるにあたって特別郵袋郵便を使って書籍を100kgほど現地に送り込んだ。最終的に帰国する時、そのかなりの部分をお世話になった方、オーストラリアの研究機関、大学の図書館に寄贈してきた。どのくらい役に立っているかわからないけれど。一方、オーストラリアでも出張で訪問した各地の大学を含め頻繁に、大学の書店に行き、バーゲン・セール(店晒しの本を定期的に格安価格で販売)で、図書館の不要本処理の販売所で、そして週末に近所で頻繁に開催されるガレージセールで書籍を手に入れ、持ち帰った。ガレージセールでA\$40(邦貨3000円程度)入手した全巻揃いの1923年版ブリタニカは装丁も美しく、内容も見ごたえあるものであった。

このように入手した書籍は研究室の書棚に二重三重に乱雑に詰め込まれるとともに、家の書棚にも詰め込まれている。数年前自宅を新築するにあたって建築業者と相談したところ、その重量に首を傾げられ、やむを得ず地下に書庫を設置する羽目になってしまった。定年退職まであと1年をきった今、退職後研究室にあるこのように買い集めた書籍(ほとんどすべてが私物)をどうするか、私自身もまた研究室の若い人たちも心配してくれている。「大学図書館への寄贈」とも考えて見たが、上述のごとくまとまりのない書籍群であることに加えて、先日の農学生命科学図書館運営委員会での審議「不要図書の処分」で不要図書は解繊され再生紙原料にまわされる事実を知り、「寄贈はネバー」との気持ちに向いてき

ている。

雑学のすすめ—新しい研究領域の萌芽

私の研究室の書棚に雑然として置かれているすべての書籍は、研究室のメンバーにとどまらず、研究室に出入りする若い研究者に完全に公開している。私がいるときでも、いないときでも、私に断りなく自由に持ち出せるようにしている。大学院生は卒業時にごそっと返却しにくる。もちろん返却されない書籍もあるかもしれない。誰が興味があって借用して行ったか予想がつくので、私が参考にする必要が生じたときには連絡して「見せて」もらう。返却されなくても、その書籍が誰かの役に立っていると考えることにしている。

なぜこのようなことをするのかと、お考えの方も居られよう。

雑学のすすめである。私の出身は木材の化学。今になってみれば、総合科学技術会議が提起する「バイオマス・ニッポン」プロジェクトの中核をなすべき専門分野であるが、何十年も同じ分野にいと、限界が見えてきてしまう。自然科学の他の分野だけでなく社会科学、人文科学の分野まで見渡し、自分が抱えている課題をいろいろな角度からながめたり、逆に他分野で自分の知識・技術を必要としているところを見出して、その分野の研究に新しい息吹きを吹き込む。時に、他の分野の書籍を読んでいるとその分野を代表される研究者が、とんでもない間違えを信じておられることを見出すこともある。私の研究分野はそうにして広がり、外国の研究者や産業界の人たちから「先生の専門は？」と聞かれて、答えに窮する事態に立ち至ってしまっている。木材化学、リグニン化学、飼料学、草地学、地球化学等々。本稿ではとりあえず、「資源環境学・植物細胞壁科学」とさせていただいている。

文部科学省が、そして総合科学技術会議が「若者の理科離れ」を心配して久しいが、事実、従来の学問体系に組み込まれることが前提の学部教育、大学院教育では若者は自然科学の研究に楽しさを見出すことは出来ないと危惧される。学部教育、大学院教育そして研究室のゼミなどを通じて中核となる知識は学んでいただくことを前提としつつも、若い研究者が自ら徹底的に雑学を学んでいただく。そこから自らが近い将来、開発し、展開すべき新しい研究分野を見出し、その分野に責任をもち、その分野でなくてはならない存在になってほしいことを心から願っている。

農学生命科学図書館の思い出

ちょうど40年前、1963年4月に理科Ⅱ類から農学部に進学してきた。進学するとすぐに農学部学生自治会委員長・副委員長選挙。その当時、農学部学生自治会は「崩壊」状態。何故か、委員長候補として立候補し、対立候補もなく当選して委員長に就任することになった。当時の農学部長神谷先生にお会いすると、「農学部図書館の建設計画が進行している」こと、その責任者は古島先生であることをお教えいただき、早速計画の概要をお聞きした。

当時農学部は「図書室」で農学部3号館の正面の階段を2階に上がってすぐ左手。実にこじんまりしたもので、古島先生から「ロックフェラー財団がアジアの中核農学図書館の設置」ということで図書館建設費が計画されていることを知らされた。60年安保の直後であり、米国のアジア戦略に組み込まれるのではという危惧もあり、また当時自衛隊員の大学施設利用（医学部図書館、理学部物理図書室）もあって、「大変な課題」として学生自治会で精力的に取り組むこととなった。古島先生と話し合いを重ね、自治会は「米軍、自衛隊は当然のこ

と、民間企業の利用も認めない」原則のもと、「大学人には広く開放し、完全開架式のオープンな図書館にする」ことを求めた。法人化と関連し、「産学連携」が大手を振ってまかりとおっている今日からみると、隔世の感がある。当時からしばらく(40年の

歴史から見ればごく最近まで)、図書館職員の方々とともに「無原則的機械化・コンピューター化反対」を唱えていたことも隔世の感である。変わってきた経過を学問と科学の進展との関連で正確に分析することが求められているのではないだろうか？

新規導入データベースのお知らせ

附属図書館情報サービス課参考調査掛

4月より新たに導入したデータベース等の新サービスをご紹介します。今まで総合図書館メディアプラザ1で提供していたCD-ROMに代わり、学内でWeb版がご利用になれます。

"GACoS : Gateway to Academic Contents System (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/gacos/index.html>)"、または、附属図書館ホームページの“東京大学で利用できるデータベース全リスト (<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/database/database-j.html>)”からご利用ください。

1. WebOYA (大宅壮一文庫雑誌記事索引 Web版)

国立国会図書館の雑誌記事索引に収録されない一般誌、大衆誌の記事検索に便利です。

2. Early English Books Online (EEBO)

Short-Title Catalogue 1475-1640 (STC-I), 1641-1700 (STC-II) および Thomason Tracts 1640-1661 に収録された初期英語図書のうちマイクロ化された資料のデータベースで、原本の閲覧が可能です。

3. ProQuest Digital Dissertations Complete (PQDD)

1861年以降160万件以上の北米・ヨーロッパの博士論文と修士論文の文献情報やアブストラクトを収録する学位論文データベースです。

4. Global Books in Print, Ulrichweb

世界中の書籍ビデオ等の英文出版物目録 Global Books in Print と、各国の雑誌・新聞の総合的な出版情報 Ulrichweb.com のデータベースです。

5. Journal Citation Reports (JCR) on the Web

学術雑誌の文献間の引用・被引用関係を分析したもので、その雑誌の論文が1年間に引用された総回数や Impact Factor (文献引用影響率)などを調べることができます。

6. ASSIA: Applied Social Sciences Index and Abstracts

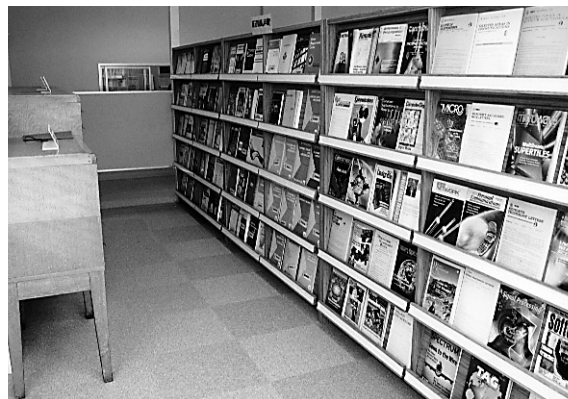
応用社会科学全般の学術雑誌の索引・抄録のデータベースで、約28万件のデータを収録しています。

生産技術研究所図書室紹介

東京大学生産技術研究所(略称、生研)は1949年千葉市弥生町に東京大学の附置研究所として発足し、1962年に東京都港区麻布新竜土町(現在の六本木)に、2001年に現在の駒場リサーチキャンパス(駒場第Ⅱキャンパス)に移転いたしました。生研には現在約300名の教職員が在職しており、研究部門は3大部門と6研究センターとを有し57研究分野(客員教授を含む)で構成されています。

工学領域のほぼ全分野をカバーするこの体制により、生研では分野の壁を越えた、あるいは総合的な立場から工学研究が展開されています。設立以来50年を越し、また新キャンパスでの展開を始めました生研では、国際総合工学として独自の分野を創出するとともに、ライフサイエンス、ナノテクノロジー、情報、通信、環境・エネルギーの社会的分野へのチャレンジを行なっています。

生研の共通施設の一部として、図書室があります。図書室は駒場第Ⅱキャンパスの南の奥に位置しており、生研の研究分野全般にわたる学術雑誌及び図書資料を収集・整備・保存し、研究者の利用に供しています。また千葉実験所には保存書庫を設け、利用頻度の少ない図書資料を保存しています。蔵書数は本学の附置研究所の中では最大であり、その特色としては、生研の研究が理工学の広い分野にわたっているため、これに関係のある資料、事に外国雑誌とそのバックナンバーの整備につとめてきたことにあります。



図書の分類は国際十進分類表などを参考に、生研の研究に適した分類法によって統一されています。1986年からは受入資料のデータを国立情報学研究所の総合目録データベースに入力しており、広く全国の利用者に提供しています。また全国の大型計算機センター、JST(科学技術振興事業団)、国立情報学研究所が提供するデータベースを利用した情報検索サービスを行なうとともにホームページからのリンクにより、閲覧室からも検索用パソコンによりOPAC(東京大学オンライン蔵書目録データベース)やNACSIS Webcat(全国大学オンライン蔵書目録)などの利用が可能となっています。さらにNACSIS-ILL(図書館相互利用)システムによるBLDSC(英国図書館)への複写依頼などにより、文献複写サービスの充実を図っています。生研図書室はゆとりのある快適な空間と学術情報の電子化に充分対応できる設備を備えた近代的な図書室を目指して出発している最中です。

SciFinder Scholarと「東京大学で利用できる電子ジャーナル」とのリンクについて

情報基盤センター デジタル・ライブラリ掛

SciFinder Scholarの論文検索結果から直接「東京大学で利用できる電子ジャーナル」へのリンクが可能になりました。

東京大学で電子ジャーナルとして閲覧可能な雑誌に掲載されている論文には、SciFinder中でIn-Houseアイコンが付きます(図1)。

このアイコンをクリックしてChemPort Connection画面へ移動し、Your organization's document resourcesの"UT ejournal"のリンク(図2)をクリックすると「東京大学で利用できる電子ジャーナル」の画面に移り(図3)、引き続き雑誌論文を閲覧することができます(図4)。

ただし、大変残念ながら論文レベルに直接リンクすることは出来ません。また、論文の掲載年によっては電子ジャーナルで閲覧できない場合もあります。ご了承ください。

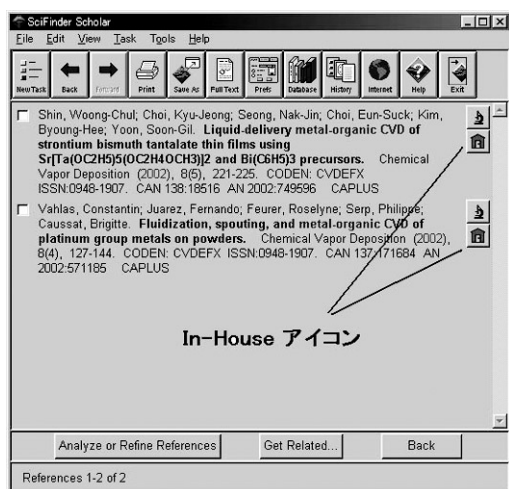


図 1

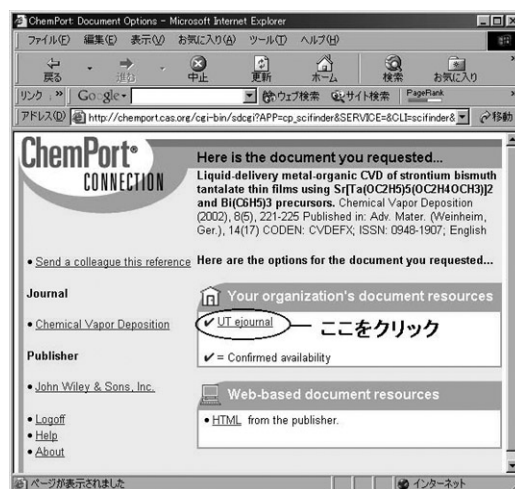


図 2

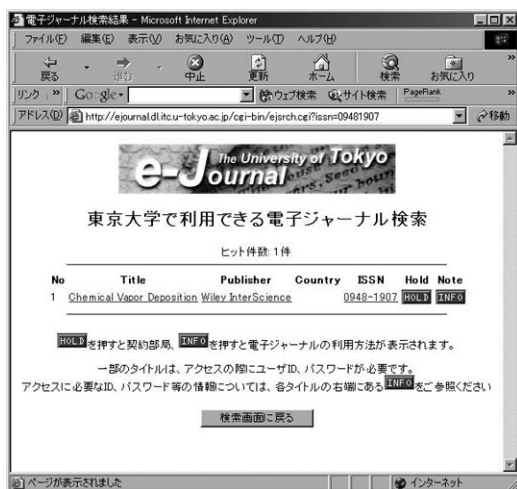


図 3

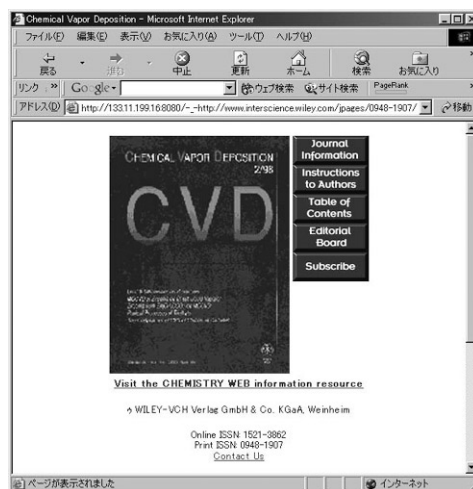


図 4

7月～8月のデータベース定期講習会のお知らせ

情報基盤センター学術情報リテラシー掛

- ◆会 場：総合図書館 1階 メディアプラザI 講習会コーナー
- ◆定 員：各回12名(予約は不要です。時間までに会場へ直接集合してください。)
- ◆コース名
 - 入門コース : OPACなど基本的なデータベースを使った検索実習を中心とします。
 - 実践コース(1) : 雑誌記事索引データベースをはじめ、各専門分野の文献データベースの検索実習を中心とします。
 - 実践コース(2) : 引用索引データベース(Web of Science)の検索実習を中心とします。
- ◆スケジュール(2003年7月～8月)時間帯: 11:00～12:00、15:00～16:00、17:00～18:00

月	火	水	木	金
	7/1	7/2 17:00-18:00実践(2)	7/3	7/4 15:00-16:00入門
7/7	7/8 11:00-12:00実践(1)	7/9	7/10 15:00-16:00実践(2)	7/11
7/14 11:00-12:00入門	7/15	7/16 17:00-18:00実践(1)	7/17	7/18 11:00-12:00実践(2)
7/21 休 日	7/22 17:00-18:00入門	7/23	7/24 休 館 日	7/25 15:00-16:00実践(1)
7/28 15:00-16:00実践(2)	7/29	7/30 15:00-16:00入門	7/31 11:00-12:00実践(1)	8/1
8/4	8/5 11:00-12:00実践(2)	8/6	8/7 17:00-18:00入門	8/8
8/11 17:00-18:00実践(1)	8/12	8/13 15:00-16:00実践(2)	8/14	8/15 11:00-12:00入門
8/18	8/19 15:00-16:00実践(1)	8/20	8/21 17:00-18:00実践(2)	8/22
8/25 15:00-16:00入門	8/26	8/27 11:00-12:00実践(1)	8/28 休 館 日	8/29 17:00-18:00実践(2)

(都合により開催日時を変更する場合があります。スケジュールはホームページ等でもご確認ください。)
お問い合わせ先: 情報基盤センター学術情報リテラシー掛(内線22649)
e-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp / URL: <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/dl/koshukai>

「附属図書館ホームページ」([URL: http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/](http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/)) もご覧ください。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 編集室 だより ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

万国博覧会草創期の資料とその周辺について紹介した特集はいかがでしたでしょうか? 普段あまり目にしない資料の説明を読むだけで、世界が広がりますね。このコレクションの展示は6月末まで総合図書館3階ホールで行っています。どうぞお立ち寄りください。

『図書館の窓』と『附属図書館ホームページ(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>)』では、順次、新しく導入したデータベースの案内やその利用法を紹介していきます。利用者みなさんに役立つ情報をどんどん盛り込んでいきますよ! (坂牧)